ラオス・ビエンチャン
現地渡航レポート

作成者
上田　健翔

救急医療サービスの現状調査

はじめに

2024 年 12 月上旬、私たちはラオスの首都ビエンチャンへ、救急医療サービス、主にレスキ ューの現状調査を目的にプロジェクトとして初めて現地渡航しました。今回の訪問先は、ラオ ス保健省、3 つの国立中央病院（マホソット病院、ミタパープ病院、セタティラート病院）、 そして 5 つのレスキュー（1623、1624、1625、1628、1630※各レスキューに名称はあります がここでは通報番号で呼ぶこととします）です。

「ここで、異なる通報番号を持つレスキューが活動しているということ？と疑問を持たれた 方、ナイス着眼点です。ラオス特有の状況下でどのようなニーズがあるかもイメージしながら ぜひ読み進めてみてください。」

調査で明らかになった現状

今回のレスキューの現状調査では、主に以下の点が聞かれました。

- **資金**：組織の運営に必要なガソリンや物資購入、車両修理の資金が不足している。
- **物資**：救急医療に必要な資材が不足しており、迅速な対応を妨げる要因となっている。
- **人員**：個人の経済的困難により、無償ボランティアを続けられなくなり、レスキューの人員が不足している。
- **技術**：教育研修を受けても辞める人員が多く、継続的に技術力の向上を図るのが困難。
- **病院**：他レスキューとの連携: SAFER プロジェクト（JICA 草の根技術協力事業）で病院・ レスキューの稼働状況を共有するシステムが稼働していた時は連携できていたが、今は稼 働が停止しているため連携はほとんど無い。そのため、１つの現場に複数レスキューが駆けつける状況に戻った。

これらの現状も踏まえ、プロジェクトとして何を描き、何を目指すかを改めて検討し、今後レ スキューが主体的に現状を改善していくためには何が必要とされるか、プロジェクトを通して ともに学び考えていきたいと思います。





最後に

次回の渡航では、タイの救急医療サービスの現状調査を行う予定です。
ぜひお楽しみにお待ちください。